

目次

第一章

1 言葉ときまり	5
1 古典文法とは	5
2 仮名遣い	6
2 言葉の単位	8
1 言葉の単位	8
2 文節と文の成分	10
3 単語の分類	12

第二章

自立語

活用のある自立語(用言)	15
1 動詞	18
1 四段活用	22
2 上二段活用	23
3 下二段活用	24
4 上一段活用	26
5 下一段活用	27
6 カ行変格活用	28

付属語

活用のある付属語	58
1 助動詞	58
1 過去の助動詞	62
2 完了の助動詞	64
き・けり	62
つ・ぬ	64
たり・り	66

7 サ行変格活用	29
8 ナ行変格活用	30
9 ラ行変格活用	31
自動詞と他動詞	32
補助動詞	33
2 形容詞	35
3 形容動詞	39
4 形容詞・形容動詞の語幹用法	42
5 用言の音便	44
活用のない自立語	47
1 名詞(体言)	47
2 副詞	49
3 連体詞	53
4 接続詞	54
5 感動詞	56

3 打消の助動詞	68
ず	68
4 自発・受身・可能・尊敬の助動詞	70
る・らる	70
5 使役・尊敬の助動詞	72
す・さす・しむ	72
6 推量の助動詞	74
む・むず	74
らむ・けむ	76
べし	78
まし	80
らし・めり	82
7 伝聞・推定の助動詞	83
なり	83
8 打消推量の助動詞	84
じ・まじ	84
9 断定の助動詞	86
なり	86
たり	87
10 比況の助動詞	88
ごとし	88
11 願望の助動詞	89
まほし・たし	89
12 奈良時代の助動詞	90
ゆ・らゆ	90
す・ふ	91

2 助動詞の音便	92
活用のない付属語	96
1 助詞	96
1 格助詞	98
が・の	98
と	102
より	103
を・に	100
へ	101
から・にて	104
して	105
2 接続助詞	107
ば・と・とも	108
ど・ども	109
が・に・を	110
て・して・で	111
つつ・ながら	112
ものの・ものを・ものから・ものゆゑ	113
3 副助詞	115
だに・すら	115
さへ	117
のみ・ばかり	118
まで・など・なんど	119
し・しも	120
4 係助詞	122
は・も	122
こそ	123
ぞ・なむ・や・やは・か・かは	124
◇係り結び	126

第Ⅲ章

5 終助詞	130
な・そ	130
てしが・てしがな・にしが・にしがな	131
もがな・がな・なむ	132
な・か・かな	133
かし	134
6 間投助詞	135
や・よ・を	135
7 奈良時代の助詞	136
つ・ゆ・ゆり・よ	136
な・ね・かも・なも	137
1 敬語	139
1 敬語に関わる「四つの立場」	140
2 敬意の方向と敬語の種類	142
3 主な敬語の種類別一覧	146
4 主な敬語の用例	148
(1) 尊敬語	148
(2) 謙讓語	155
(3) 丁寧語	161
5 特別な敬語表現	162
(1) 二方面に対する敬意の表現（二方面敬語）	162

(2) 二重敬語（最高敬語）	164
(3) 絶対敬語	165
(4) 自尊敬語（自尊表現）	166
2 文の構造	168
1 文節と文節の関係（文節相互の関係）	168
2 注意が必要な文の構造	172
3 構造による文の分類（単文・重文・複文）	176
3 和歌の修辞	180
枕詞	180
序詞	182
掛詞	184
縁語	186
見立て	187
体言止め	188
本歌取り	188
歌枕	189
五七調と七五調	190
句切れ	191
付録	
① 口語訳の際に注意したい語句（付属語の複合形）	192
② 紛らわしい語の識別	194
③ 二種類の用法を持つ敬語	201
④ 中古主要敬語一覧（五十音順）	202
索引	204